

# 令和5年度入学試験問題

## 国語 (3科目入試)

### 注 意

1. 合図があるまで表紙をあけないこと。
2. 解答はHBの黒鉛筆もしくはシャープペンシルで解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークすること。
3. 解答用紙に受験番号を正しくマークし、氏名を記入すること。
4. 解答用紙に解答以外のことを書いた場合、その答案は無効とする。
5. 受験票は机に出しておくこと。
6. 【国語】の問題は1番から40番までとなっており、別に記述問題が1問あります。記述問題の解答は、マークシートではなく記述問題用の解答用紙に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

精神の働きにおいて、能動的な契機を受動的な契機より重視するのが、西洋哲学の基調であった。情念も感覚も習慣も受動であって、能動的な主体の能力としての知性や理性や意志によってコントロールすることが人間の行為の模範的形式とされたのである。

こういったコントロール原則が、圧倒的に哲学的場面を支配してきた。

①、新型コロナウイルスにしろ地震にしろ台風にしろ人間の十分な制御下にあるものではない。「人新世」という用語が流行している。人間の活動が地球の自然環境を変動させている時代である。能動的に地球環境を変化させたというよりも、人類の活動の副作用だ。目指した作用（主作用）において能動的であつても、目指されていない副作用においては主体は能動的ではない。しかし、人間が唯一の相において行為しようとしても、人間の側の方で身体的にも精神的にも多相に及ぶ仕方で行為がなされ、その結果も多相に及ぶ。多相に及ぶあり方、そしてそれらの相の中に齟齬が生じ、そのポテンシャルが流れるときに、出来事が生じる。主体と言い能動性と言い、そういった多相的な事象の生起の中で一つの相に視点を絞り、手段目的連関に収められ、コントロールできたことを能動的と呼んだにすぎない。

②、細かい系のごとき事象の連なりに、手柄や名誉や意味や責任といった、人間がそれを求めて競争し争う幻想（ファンタズム）の万華鏡たる人間社会を見ると、その意味合いをドウルーズ

は内在平面という用語に込めたような気がする。

情念や感覚や享受といったことに重要な意味付けをしたとしたら、「受動的総合」ということを基礎に置くしかない。「充足」という一見心理学的でありながら、必要条件を準備し、物事の成立の十分条件を準備し、成立させるという意味での「充足」という、幾分関数概念の名残を残した意味での「充足」を持ち出したい。食べ物の甘さへの満足を自分で意志的に成立させることはできなくて、感覚の閾値や習慣や学習によって構成される満足の基準は、満たされれば自ずと満足という充足が生じる。楽しみも快楽も享受も達成感も幸福も、いや善も美もそのように成立する。

I にすぎないという見方では

ない。主体と客体、原因と結果、内部と外部、能動と受動といった二元論を見事にすり抜ける事態が現れている。そういった傾向への反動が、二十世紀後半以降の哲学の流れなのだろう。

③、こういった情念や感覚や受動性への着目は東洋では昔から思想の基調であつた。しかし、そういったものは、類似した多数の概念が粘着し合い、融合したり、干渉し合い、常に錯雑の相を積み重ねてきた。その意味で、二元論的な枠組みは明晰に語ることに利点が多いのだ。ドウルーズの語る哲学が錯綜を極めるのは、彼の扱うテーマの広がり、その内実、その方法からして当然のことなのだと思う。明晰で朝の光に照らされたように輪郭のはっきりした哲学など、ドウルーズ哲学では呪詛されるべきものだ。私はそう思う。

④、フッサールにおいて、受動的総合は能動的総合の土台であり、必ずしも中心的意義を担うものではない。しかし、ドウルーズにおいて、受動的総合は中心的な位置を占めるようになる。

これはどのように考えればよいのか。哲學史的な展開のなかで考えれば、概念・観念を基礎とする哲学が主流を占める中で、哲學史には別の系譜が存在している。概念を基礎とする流れとは、<sup>(注3)</sup> アリストテレス主義であり、概念・観念に中心性を置く流れは、近世に入っても合理主義、經驗論、ドイツ観念論、現象学と圧倒的主流を占めてきた。近世に入って「観念の道」ということが語られるが、<sup>2</sup> 主知主義的な流れが一方にある。

別の流れも存在してきた。主意主義と言ってもよいかもしれないが、主意主義という言葉自体が十九世紀の産物であり、その内実ははっきりしない。<sup>(注4)</sup> ハンナ・アーレントが『精神の生活』において、<sup>(注5)</sup> トマス・アクィナスを主知主義、<sup>(注6)</sup> ドウンス・スコトウスを主意主義と整理して対比的構図を作り出そうとした。

主知主義と主意主義の対立は、善を求める行為において、知性が先立つのか意志が先立つのか、という形式で論じられるが、知性と意志は時間的な前後関係で発動するわけではないため、そのような形のままでは論じにくい。トマスとスコトウスにおいては、人間の意志は悪を欲することができるのか、という形式で論じられた。トマスにおいて、意志は理性的欲求であり、知性によって善と認識された対象を欲求することができるのであって、自然本性的に人間の意志が悪を欲することはできないとされた。スコトウスにおいては、人間の意志の自由を強調し、悪を欲することもできると述べたのである。

<sup>3</sup> この主意主義の流れはアウグスティヌスに一つの起源を有し、意志を知性に従属する欲求能力とするアリストテレス主義とは違って、意志と愛との結びつきを重視し、愛は対象をそれ自体で、<sup>(注7)</sup> ④ 何かほかの目的のためにではなく求めることであり、善であるがゆえに愛するわけではない。<sup>(注8)</sup> 【1】

この主意主義の流れは、唯名論や信仰義認論などにも入り込んでいくのだが、情念論の系譜に貫入し、<sup>(注8)</sup> ヒュームの思想に浸透している。ヒュームが認識よりも信念を、観念よりも印象を重視したことは、その系譜学的探究においては膨大な作業が待ち構えているとはいえず、私には十分成り立つ見方だと思われる。ドウルーズが、概念(コンセプト)に代えて、知覚の対象として被知覚態(ペルセプト)、感情の対象としての変様(アフエクト)を立ち上げ、ペルセプトとアフエクトを並列し、それらの連鎖として芸術作品への立ち向かいを考えていたことは、主意主義の流れに身を浸していたことの兆候として見るべきであると思う。

<sup>(注9)</sup> 『差異と反復』を読んで、思想の目鼻立ちも姿形も分からないまま、読み方について II とき、これはヒューム論ではないのか、と思つて入り口が見つかったような気になったことがある。ヒューム論と限定するにはあまりにも内容が多様なのだが、ヒューム論ということは、時間についての三つの総合という基本図式とも結びつき、都合がよい。<sup>(注9)</sup> 【2】

反復は、反復する対象に、何の変化ももたらさないが、その反復を観照する精神には、何らかの変化をもたらす。ヒュームのこの有名なテーゼは、わたしたちを問題の核心に連れてゆく。

第一の時間の総合とは、生ける現在において成立している縮約であり、外部からの刺激が、感光板としての精神に像を刻むことだ。そして、複数の瞬間を縮約して、融合して、重みをもった印象を作り上げる。【3】

ここで印象ということには注意を喚起しておきたい。この印象という一見受動的でしかない精神への作用も、「受動的総合」の場合と同様に、精神の構成的契機を示している。【4】

人間の精神に現われるすべての知覚は、二つの異なる種類に分かれる。それらをそれぞれ、「印象」⑤「観念」と呼ぶことにする。両者の相違は、それらが精神を打ちわれわれの思惟または意識に進入する際に有する、勢いと生気の度合いに存する。最大の勢いと激しさを伴って精神に入って来る知覚を、「印象」と名づけることができる。私は、この名のもとに、心に初めて現われるわれわれの諸感覚、諸情念、諸情動のすべてを含める。「観念」という語で私が意味するものは、思考や推論に現われる、それら印象の生気のない像である。(ヒューム『人間本性論 第一巻』)

ここで、「ヒューム革命」<sup>5</sup>が生じていたのだ。誰にも気づかれない静かな革命であり、その意味では悲しい革命だったのだが、革命であることに違いはない。裏声でⅢのだ。観念とは生気のない像でしかないのだ。哲学はアリストテレス以来、専ら概念や観念を対象としてきた。ヒュームは、観念を「生気のない像」として副次的な役割を与え、印象を中心に持つてこようとする。ヒュームは信念という概念を提起し、それを認識の代わりに用いた。ヒュームは印象という概念を提起し、それを観念の代わりに用いた。この一節で、ヒュームは(注10)『方法序説』のなかでの「我思う故に我あり」の後に続く、大転回を引き起こしたと思っただけだ。【5】

印象とは外的事物の精神への印刻という受動的な意味で用いられていた。生気のある知覚が心に生み出される過程ではなく、生気ある知覚そのものを表す。これは当時の慣用とは異なるものであり、これに対応する語は英語にも他の言語にもないとヒューム自身が明言している。

(山内志朗『極限の思想 ドゥルーズ 内在性の形而上学』による)

(注1) ドゥルーズ——フランスの哲学者。

(注2) フッサール——ドイツの哲学者。

(注3) アリストテレス——古代ギリシアの哲学者。

(注4) ハンナ・アーレント——ドイツ出身の哲学者、思想家。

(注5) トマス・アキイナス——中世ヨーロッパ、イタリアの神学者、哲学者。

(注6) ドウンス・スコトウス——中世ヨーロッパの神学者、哲学者。

(注7) アウグスティヌス——ローマ帝国時代の神学者、哲学者、説教者。

(注8) ヒューム——スコットランドの哲学者。

(注9) 『差異と反復』——ドゥルーズの著作。

(注10) デカルト——フランスの哲学者。

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部1「西洋哲学の基調」とあるが、これはどのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **1**。

- a 新型コロナウイルスや地震や台風といったことに対しても、人間が十分制御でき、人間が環境に影響を与えることができるとする考え方。
- b 主体と客体、原因と結果などといった二元論で物事を捉えることで、人間が意図通りに環境を一から作り上げてきたとする考え方。
- c 外界からもたらされた刺激により知覚や感覚を獲得し、それらをもとに受動的総合を作り上げ、世界を認識しようとする考え方。
- d 本来は多相な事象が生じているのだが、知性や理性によって一つの相に焦点を当て、それらを明晰に輪郭づけようとする考え方。
- e 自然環境を手段として用いる手段目的連関に入ることによって、人間を情念的、感覚的に満ち足りた状態にできるとする考え方。

問2 空欄①～⑤を補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。ただし、同じものを二度以上選んではならない。解答番号は **2**、**3**、**4**、**5**、**6**。

a もちろん      b つまり      c しかしながら      d および      e そのような

問3 空欄Iを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **7**。

a 客観的なもの      b 相対的なもの      c 一般的なもの      d 絶対的なもの      e 主観的なもの

問4 傍線部2「主知主義的な流れ」とあるが、これはどのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は8。

- a ハンナ・アーレントによって提唱された、合理主義、経験論、ドイツ観念論につながる流れで、観念や概念を中心とする考え方。
- b アリストテレス主義に当たると、観念や概念を基礎とする流れであり、意志は知性に従属するものであるという考え方。
- c ドゥルーズ哲学の中心的な位置を占めるものであり、善を求める行為において知性や理性が意志よりも先に立つという考え方。
- d トマス・アクィナスの考え方として分類されるもので、自然本性的に人間は意志により悪を欲することが可能であるとする考え方。
- e フッサールが現象学において主張したもので、受動的総合を能動的総合の土台になるものとして積極的に評価しようとする考え方。

問5 傍線部3「主意主義の流れ」とあるが、これはどのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は9。

- a 受動的総合を評価するドゥルーズに通じるものであり、哲学的に物事を捉えるのではなく、芸術的に物事を捉えようとする考え方。
- b ドウンス・スコトウスによって中世になって主張されたものであり、知性と意志とは時間的な前後関係を有しないと考える考え方。
- c ハンナ・アーレントによって主知主義と対比的に唱えられたものであり、人間は善よりも悪を欲求するものであるとする考え方。
- d ヒュームの思想に深く浸透しているものであり、膨大な作業が必要であるため、系譜的に探究するだけの価値がないとされる考え方。
- e アウグスティヌスに一つの始まりを有するものであり、理性的、知性的なものよりも意志的なものの方を重視しようとする考え方。

問6 空欄Ⅱを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は10。

- a 途方に暮れていた
- b 馬脚をあらわしていた
- c 白黒をつけかねていた
- d 謀を巡らしていた
- e 理屈をこねていた

問7 傍線部4「その反復を観照する精神」とあるが、これはどのような精神か。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。

解答番号は **11**。

- a その反復を注意深く、正確に繰り返そうとする精神。
- b その反復を他の物事と比較しながら捉えようとする精神。
- c その反復を主観を交えずに冷静に認識しようとする精神。
- d その反復をよく見て、問題を洗い直そうとする精神。
- e その反復を要領よく、コンパクトにまとめようとする精神。

問8 傍線部5「ヒューム革命」とあるが、これはどういうことか。その説明として、最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号

は **12**。

- a いままでデカルトが用いた「観念」という言葉に注目していた哲学が、誰も用いたことのなかった「印象」という言葉に注目するように変化したということ。
- b いままで生気のない像である「観念」という概念を用いた営みであった哲学が、生気のある像である「印象」という概念を用いた営みに変化したということ。
- c いままで思考や推論に現れる「観念」を対象としてきた哲学が、われわれの心に現れ、精神を構成するうえで必要とされる「印象」を対象とするように変化したということ。
- d いままで能動的総合をもたらす「観念」に積極的な価値を置いていた哲学が、受動的総合をもたらす「印象」に積極的な価値を置くように変化したということ。
- e いままで対象に何ら影響をもたらさない「観念」に根拠を置いていた哲学が、精神に何らかの影響をもたらす「印象」に根拠を置くように変化したということ。

問9 空欄Ⅲを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は13。

a 陶冶すべきだった      b 薫陶すべきだった      c 翻意すべきだった      d 喝采すべきだった      e 揭示すべきだった

問10. 次の二文は、本文中の【1】～【5】のどこに入るか。後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は14。

しかし気づいた人はいなかった。気づいた人がいようがまいが、ここで情念論への近代的入り口が措定されたのは確かだと思う。

a 【1】      b 【2】      c 【3】      d 【4】      e 【5】

問11 本文の内容と一致するものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は15。

- a 観念の代わりに印象を中心的な位置においたヒュームの思想を、ドゥルーズは捉えきれず、評価すべきかどうか思案していた。
- b フッサールにとって受動的総合は能動的総合の土台にすぎないが、ドゥルーズにとっては中心的な位置を占めるものであった。
- c 二十世紀後半以降の西洋哲学は、東洋では昔から思想の基調であった情念や感覚にやると着目し、東洋に追いつくことになった。
- d 「人新世」という用語が流行しているが、ドゥルーズはヒュームの考え方に基づいて、人類の環境破壊を早くから批判していた。
- e ドゥルーズは二元論的な枠組みを用いて事象を捉えなかつたため、能動的ではなく受動的にしか総合することができなかった。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 10 の番号を付してある。

1 ハロルド・イニス、マクルーハン、エリック・A・ハヴロック、ウォルター・J・オングの四人によって展開されたトロント学派メディア論の基幹をなすのは、各時代の主導的なメディア技術が、人間や社会の枠組みを決定するとする〈メディア〉史観である。なかでもマクルーハンは、主導的〈メディア〉の別によって人類史を四区分した上で、それぞれの主導的メディアをコアとして編制されるメディア諸技術の星座的布置、メディアの「生態系」を〈銀河系〉と名付ける（マクルーハン 一九八六）。このメディア「生態系」としての〈銀河系〉を、そこで再生産される固有の〈認識Ⅱ存在〉関係を軸に捉え返しつつ、ここでは〈メディア〉パラダイムと呼ぶことにしたい。

2 主導的メディアの別によって四区分された〈メディア〉パラダイムは、〈声〉↓〈手書き〉文字↓〈活字〉↓〈電気Ⅱテレビ〉と推移するが、これら〈メディア〉パラダイムは相互に閉じており、したがって各パラダイムは共約性をいっさい欠いた、可能的な体験の体制Ⅱ〈環境〉をそれぞれに創りだす。重要なことは一五世紀のグーテンベルクによる活版印刷術の発明を嚆矢とし、一六世紀のペトルス・ラムスによる印刷教科書を使用した教育改革（ラムス主義）を起爆剤として、〈活字〉パラダイム、マクルーハンの用語系でいえば〈グーテンベルクの銀河系〉が近現代を支配してきたという事実である。マクルーハンを含め、トロント学派は並べてこの〈活字〉パラダイムを呪詛し敵視する。その理由については後述するが、彼らが〈活字〉パラダイムに對置し、理想視するのが古典古代の〈声〉のパラダイムである。

3 〈メディア〉パラダイムは、そこでの〈認識Ⅱ存在〉関係を技術的に決定するが、その技術的決定において枢要な役割を演じるのが感覚配合比率である。感覚配合比率はアリストテレスⅡトマスの、いわゆる「共通感覚」をマクルーハンがメディア論的に〈解釈Ⅱ改釈〉し、Iであって、眼・耳・鼻・舌・身の五官、視・聴・嗅・味・触の五感の間に成立している感覚体験における可塑的平衡系の謂である。この感覚的な平衡系は主導的メディアを基礎としつつ、その拘束下にあり、したがって主導的メディアは感覚配合比率を介してそのパラダイムにおける感覚体験の大枠を決定づける。一方、主導的メディアが交代すると感覚配合比率は組み替わり、新たな感覚的平衡系が編制されることで、感覚体験の質そのものも（注1）ゲシュタルトチェンジを遂げることとなる。

4 問題は、トロント学派が嫌忌する〈活字〉パラダイムと、彼らが理想視する〈声〉パラダイムがそれぞれいかなる感覚配合比率を構成するかである。

5 マクルーハンは<sup>2</sup>〈活字〉パラダイムにおいては、視覚が突出した感覚配合比率Ⅱ感覚の平衡的定常系が編制されると考え、この体制を「視覚強調的」あるいは「視覚偏的」と特徴付ける。ここで誤解してはならないのは、この場合の視覚とは、単なる「見ること」ではない点である。ある論者は、〈声〉のパラダイムにおいても視覚は重要であるから、〈活字〉パラダイムを「視覚中心」と特徴付けるのは間違いであるなどという、自らの読解の浅さを告白する

がごとき頓珍漢な、ほとんど揚げ足取りといつてよい水準のマクルーハン「理解」を恥ずかしげもなく披瀝れきしているが、マクルーハンが「視覚中心」の語で指摘しているのは、「活字」パラダイムが一言でいつて「「截断」ないし「疎隔」のパラダイムである、ということである。「活字」とは表象化の（メディア）である。フリードリヒ・キットラーの卓拔な表現を借りれば、「活字」を読むことによつて、人びとは物体の輪郭や色彩、人物の肌触りやこわね声色、料理の味や芳香を眼前に想おもい描くのであり、それはいわば「アナログのヴァーチャル・リアリティー装置」である。すなわち「活字」は五「官」感の対象すべてを想像的「視覚」すなわち「表象」ないし「代理存在」のなかで再現・構成する（メディア）なのである。そして「表象」は、私たちの「前に」立てられた想像上の「スクリーン」のなかで展開され、見られる対象と見る主体との間に割り込んで入る対象の「代理物」であるがゆえに、「見る者」と「見られる物」、「主観（主体）」と「客観（客体）」との間に明確な分割線を引き、両者を「「截断」」「「疎隔」」する。かくして冒頭で指摘した「見る／見られる」、「主観（主体）／客観（客体）」の双対が「活字」パラダイムにおいて成就する。

6 「活字」メディアのこうした視覚中心主義もしくは心像主義は、「表象」編制の原理として、マクルーハンが「線形性」と総称する首尾一貫した「論理」や閉じた「作品世界」を産みだすと同時に、「「截断」」と「「疎隔」」を方法論化することで対象の無制限で緻密な解析・記述へと向かう分析的精神を涵養する。それはハイデッガーのいう「世界像」と異なるものではない。さらに、「「截断」」と「「分離」」は客体としての対象のみならず、主体としての人間にも当然向かう。そのとき人間は「表象」を介してしか互いにアクセスが不可能な分断され孤立した「個人」となる他ない。共同体主義的なカトリシズムの信条を立論のバックボーンとして有するトロント学派、とりわけ個人主義的なプロテストанトの教義を嫌忌して成人後にカトリックに改宗したマクルーハンにとって、「活字」パラダイムが惹起する共同体的毀損とその個人への解体は到底座視に耐えない。ここにおいて、「活字」の視覚中心主義の対極に位置する「声」の視覚中心主義が視界に浮上してくる。

7 「活字」パラダイムが、「「截断」」と「「疎隔」」によつて特徴付けられるのに対して、「声」パラダイムは「融合」と「包摂」をその本質とする。それがなぜ視覚中心主義と呼ばれるかといえは、視覚においては、視覚においてのように「表象」が介在することなく、触れるものと触れられるものとが直接に触れ合うからである。さらに、接触面において触れるものと触れられるものとは反転・交替し、両者は融合一体化する。五「官」感にあつて「視覚」と爾余の「聴覚」「触覚」「味覚」「嗅覚」とは鋭い対立関係を構成するのであつて、「視覚」のみが「表象」を介した「「截断」」的、「「疎隔」」的な間接的知覚体験をもたらす。それに対して、爾余の感覚はいずれも触れるものと触れられるものとの直接的な密着体験であつて、その意味で広義の「触覚」のヴァリアントである。マクルーハンが「声」パラダイムを「「触覚中心」」と性格づけるのは、彼が聴・触・味・嗅の四感覚に如上の「触覚」性を共通に認めたとうえで、「文字」発明以前の「声」メディアが「いま・ここ」にある知覚現場の諸物を

II 全体に統括・包摂してゆく体制であることを洞察したからに他ならない。それゆえに彼は「声」パラダイムを「聴・触覚的」と特徴付ける。

⑧ 重要なことは、〈声〉パラダイムの原理である〈融合〉と〈包摂〉は、触れるものと触れられるものとの区別をそれらの交替と反転によって取り消し、主体と客体との境界を曖昧化させてゆくことである。そればかりではない。〈声〉パラダイムの二つの原理は当然人間にも及び、〈声〉パラダイムに生きる成員を同じ一つの共同体に浸し込み、有機体にも擬えらるる地縁的共同体の分枝となす。マクルーハンはじめカトリシズムを奉ずるトロント学派の面々が〈声〉パラダイムを理想視するのは、このパラダイムが、原始キリスト教において典型的に見られた如き調和的共同体を実現する〈融合〉と〈包摂〉とをパラダイム存立の根本原理とするからである。

⑨ マクルーハンは、一九六〇年代から急速な普及を遂げた〈電気〉メディア、すなわちテレビに〈声〉パラダイム復活の兆しを認めるとともに、著書『グーテンベルクの銀河系』によって〈活字〉パラダイムにⅢのだった。さらに彼は、テレビが〈声〉の電氣的増幅装置であるという解釈にもとづき、〈電気〉パラダイムにおいては〈融合〉と〈包摂〉の両原理が、〈声〉パラダイムにおける村落共同体の規模を越えて地球大に拡張されると予想して、惑星規模の共同体、すなわち「地球村」誕生の未来図をすら描き出した。

⑩ マクルーハんに典型的にみられるこうした反視覚主義<sup>3</sup>触覚主義は、必ずしもトロント学派に固有のオブセッションではない。たとえば、一九三〇年代から四〇年代にかけてヨーロッパで猛威をふるったナチスの〈血と土〉や〈鋼鉄のロマン主義〉のスローガンは、誤った生物学主義にもとづいてはいるものの、やはり〈声〉による共同体復活の企図であって、マクルーハニズムに先駆けて近代的個人主義を反近代的な共同体原理によって乗り越えようとするものである。わが国における同時期の日本浪漫派や悪名高い〈近代の超克〉論もまたⅣとみてよい。一般にロマン（浪漫）主義は〈声〉パラダイムの復興を標榜しはするものの、結局はそれを〈活字〉パラダイムの〈メディア〉に頼る他、再現の術<sup>すべ</sup>を持たない点で、予め挫折を運命付けられている。それは「失われたエデンの園」の再来を夢見ながら自己欺瞞的な人工楽園の建設に邁進する疑似触覚主義、というより似而非触覚主義に過ぎない。

（大黒岳彦「ネット・ワーク」の感覚配合比率 視覚中心主義の終焉」による）

（注1）ゲシュタルト——部分の寄せ集めではなく、それらの総和以上の体制化された構造、形態のこと。

（注2）フリードリヒ・キットラー——ドイツのメディア評論家。

（注3）ハイデッガー——ドイツの哲学者。

\* 問題の作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部1「トロント学派メディア論」とあるが、これはどのような考え方か。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は16。

a 主導メディアの種類によって区分された〈メディア〉パラダイムは、〈声〉↓〈手書き〉文字↓〈活字〉↓〈電気テレビ〉へと、時代とともに進化を遂げていくという考え方。

b 人間や社会の枠組みはメディア技術によって決定されるため、どのメディア技術を利用するのかという選択を社会全体で議論した上で決定しなければならぬという考え方。

c 〈メディア〉パラダイムは時代とともにさまざまなものが登場してきたが、歴史を通じて〈活字〉パラダイムが人間にとって主導的な機能を果たしてきたという考え方。

d 各時代の主導メディアにより、〈認識Ⅱ存在〉関係を決定することに大切な役割を果たす感覚配合比率が異なり、感覚体験の質も変わってしまうという考え方。

e 〈声〉パラダイム、〈手書き〉文字、パラダイム、〈活字〉パラダイム、〈電気テレビ〉パラダイムのうち一つだけが各時代に使われ、他は淘汰されていったという考え方。

問2 空欄Iを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は17。

a 主客転倒した概念      b 付和雷同した概念      c 取捨選択した概念

d 換骨奪胎した概念      e 我田引水した概念

問3 傍線部2「〈活字〉パラダイム」とあるが、これはどのようなものであるのか。その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **18**。

a 〈活字〉パラダイムは、五〈官Ⅱ感〉の対象すべてを視覚の中で再現、構成することによって、視覚強調的なものから主観的な認識へと向かっていくものである。

b 〈活字〉パラダイムは、客体としての対象を主体としての人間から分離するもので、〈截断〉ないし〈疎隔〉を特徴とし、分析的精神を徐々に養育するものである。

c 〈活字〉パラダイムは、「見ることを中心に据えている視覚を他の感覚よりも突出させており、視覚を他の作用と同時に作用させることのない排他的なものである。

d 〈活字〉パラダイムは、首尾一貫した論理に基づき開かれた作品世界をつくることによって、共同体主義的ではなく、個人主義的な世界を構築していくものである。

e 〈活字〉パラダイムは、見られる対象と見る主体との間に割り込んで入る対象の「代理物」である〈表象〉に基づくものであり、普遍的な認識方法となるものである。

問4 二重傍線部i、iiのここでの意味として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つずつ選びなさい。解答番号は i - **19**、ii - **20**。

i 揚げ足取り

a つじつまが合わない、的外れな批判をすること      b 浅はかで皮相な見解を相手にぶつけること

c 気後れせずに、ずうずうしい態度を取ること      d 相手の言い損ないや言葉尻を捉えてなじること

e 相手のことを気にせず大胆に批判すること

ii 卓抜な表現

a 並外れていて理解が難しい表現      b 端的に要点をまとめた表現      c 微妙な意味合いをうまく表した表現

d 普通とは違った訝しい表現      e 際立って優れている表現

問5 空欄Ⅱを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **21**。

- a 原理的
- b 暫定的
- c 普遍的
- d 有機的
- e 概念的

問6 空欄Ⅲを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **22**。

- a 一脈相通じた
- b お墨付きを与えた
- c 引導を渡した
- d 胸襟を開いた
- e 矛先を転じた

問7 傍線部3「触覚主義」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **23**。

- a 触覚主義は、マクルーハンたちのトロント学派だけではなく、西洋においても日本においても、復権の試みが行われていた。
- b 触覚主義は、共同体原理を反近代的な個人主義によって超越しようとする考えの下で掲げられた政治的に偏ったものである。
- c 触覚主義は、マクルーハンが先駆的に掲げたものであり、その後、さまざまな考えを持った人たちが追従することになった。
- d 触覚主義は、〈活字〉メディアをうまく利用しながら、自らの考えを復権させようとするたたかな戦略をとるものであった。
- e 触覚主義は、テレビを主導とする〈電気〉パラダイムにおいて、地球規模の共同体を出現させて、復権することになった。

問8 空欄Ⅳを補うのに最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **24**。

- a 原理原則のイデオロギー
- b 融通無碍げのイデオロギー
- c 浅学菲才ひのイデオロギー
- d 杓子定規しゃくしのイデオロギー
- e 同工異曲のイデオロギー

問9 本文を大きく三つに分けるとすると、**2**～**10**のうちどこどこで区切るのが適当か。二つ目の先頭と、三つ目の先頭の番号の組み合わせとして最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **25**。

- a **4**・**7**
- b **4**・**8**
- c **5**・**8**
- d **5**・**9**
- e **6**・**9**

問10 次の①～⑤のうち、筆者の考え方にあてはまるものにはa、あてはまらないものにはbをマークしなさい。解答番号は ①―26、②―27、③―28、

④―29、⑤―30。

① プロテスタントの教義を信仰していたマクルーハンは、カトリシズムの信条を立論のバックボーンとしていたトロント派の中では異質な存在であったが、晩年になって改宗することになった。

② 〈活字〉パラダイムは、一六世紀にペトルス・ラムスが行った印刷教科書を使用した教育改革をきっかけにして近現代を支配してきたが、マクルーハンはそれを好ましく思っていなかった。

③ マクルーハンは、〈電気〉パラダイムによって、〈声〉パラダイムの復活の兆しを見るとともに、〈声〉パラダイムにおける村落共同体の規模を越えて地球大の共同体が生まれると予想した。

④ 感覚配合比率は、アリストテレスⅡトマスの「共通感覚」をマクルーハンが解釈し直したものだが、その背景には、絶対化している〈声〉のパラダイムを相対化したいという思いがあった。

⑤ 〈声〉パラダイムにおいても視覚が重要な要素としてあるので、〈活字〉パラダイムを「視覚中心」と特徴付けることは間違いであると、マクルーハンを含めたトロント派は考えていた。

問11 本文でマクルーハンは「〈活字〉パラダイム」と対置させて「〈声〉パラダイム」を理想化しているが、「〈声〉パラダイム」をどのようなものだと考えているのか。本文中の語句を用いて、一〇〇字（句読点なども字数に含む）以内で説明せよ。

※解答は記述問題用の解答用紙に記入しなさい（マークシートには記入しないこと）。

問1 次の漢字の画数として正しいものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **31**。

- 絡  
a 十画      b 十一画      c 十二画      d 十三画      e 十四画

問2 熟語の表記が三つとも正しいものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **32**。

- a 厄日ー服喪ー詮慮  
b 刻服ー怒気ー頻発  
c 躍如ー類比ー節装  
d 起業ー粹人ー篤実  
e 暗礁ー確策ー稼働

問3 次の文の、カタカナ部分の傍線部と同じ漢字を書くものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **33**。

窓ガラスがコッパみじん微塵に碎け散る。

- a 新たな問題がハセイする。  
b ハスウを切り捨てる。  
c 状況をハアクする。  
d 円安のヨハを受ける。  
e ハメを外して騒ぐ。

問4 次の四字熟語の空欄に使われている漢字の組み合わせとして正しいものを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **34**。

巧言□色 — □状酌量 — 金科玉□ — 借老同□ — 好□到来

a 礼—乗—条—結—期

b 礼—情—状—穴—期

c 礼—乘—条—穴—機

d 令—情—条—穴—機

e 令—情—状—結—機

問5 傍線部の慣用句の使い方が正しくないものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **35**。

a そんなことをすれば一生を棒に振ることになるぞ。

b 緊張感を欠いている選手にくさびを打ち込んだ。

c 指をくわえて同僚の昇進をみている。

d 神輿を担いで会長に祭り上げる。

e 完膚なきまで相手をやっつける。

問6 慣用句とその意味の組み合わせとして正しくないものを、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **36**。

a 大見得を切る — 自信のほどを大げさな言動で示す。

b 話の腰を折る — 話を途中でやめてしまう。

c とうが立つ — 盛りが過ぎる。

d 手玉に取る — 人を思い通りに操る。

e 人後に落ちない — 他人に引けを取らない。

問7 次の五つの熟語の反対語を1～10のうちから選ぶとき、正しいものがすべて含まれている組み合わせを、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **37**。

「躊躇」ちゆうちゆう 「恥辱」 「不足」 「回避」 「陳腐」

1 超過 2 穩当 3 決断 4 直面 5 活発 6 名誉 7 清楚そ 8 該当 9 斬新 10 拡充

a 1、3、5、4、8

b 2、3、4、6、9

c 1、2、7、8、9

d 2、4、5、7、10

e 1、3、4、6、9

問8 次のカタカナ語の意味を、後のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **38**。  
「レトリック」

a 神秘学 b 形而上学 c 修辞学 d 審美学 e 人文学

問9 井伏鱒二の作品を、次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **39**。

a 新生 b 阿部一族 c 山椒魚 d 冬の蠅はえ e 日輪

問10 1909年に青森県で生まれ、「無頼派」宣言を行い、小説『斜陽』や『グッド・バイ』などを発表したのは誰か。次のa～eのうちから一つ選びなさい。解答番号は **40**。

a 太宰治 b 井上靖やすし c 大岡昇平 d 川端康成 e 佐藤春夫